

市長室：対話の記録

要旨

開催内容の公開

- ・市長あいさつ
- ・mickle【ミクル】について
- ・井上さん(工房 灯りのたね)
- ・丹野さん(work studio 雅)
- ・伊庭さん(家具工房 伊庭善)
- ・丸一さん(有限会社 TUC)
- ・高橋さん(有限会社高橋工芸)
- ・吉田さん(有限会社北嶺工匠)
- ・青柳さん(Arms)
- ・花本さん(D'ESPACIO[ex. Candle Craft])
- ・大門さん(art craft BAU 工房)
- ・堀内さん(halico)

市長終わりのあいさつ

第 13 回目となる今回は、旭川市及び近郊に工房を構え、クラフトや家具を製作している若手作家 10 名で構成する「mickle【ミクル】」の皆さんと、対話、意見交換を行ないました。



日時	平成 19 年 8 月 8 日(水) 午後 6 時 30 分～午後 7 時 45 分
場所	旭川リサーチセンター 交流サロン(旭川市緑が丘東 1 条 3 丁目 1 番 6 号)
相手団体	mickle【ミクル】
出席者	旭川市長 西川将人 mickle【ミクル】(敬称略) 高橋秀寿(有限会社高橋工芸) 青柳勲(Arms) 丹野雅景(work studio 雅) 井上寛之(工房 灯のたね) 花本美幸(D'ESPACIO[ex. Candle Craft]) 伊庭崇人(家具工房 伊庭善) 堀内亜理子(halico) 吉田直人(有限会社北嶺工匠) 大門和真(art craft BAU 工房) 丸一直哉(有限会社 TUC)

対話の内容

以下、mickle【ミクル】の皆様については、敬称を省略させていただきます。

市長はじめのあいさつ

こんばんは。

今日はまちづくり対話集会で皆さま方と意見交換をさせていただく機会をいただきましてありがとうございます。

市内また近郊で木工、クラフト関係で頑張っている若い世代の皆さんとお聞きしておりま

す。旭川屋におきまして作品等の展示、ご協力をいただきましてありがとうございます。あらためて申し上げるまでもないのですが、旭川市は家具、木工のまちとして全国的に、また世界でもかなり知名度が高くなってきているのではないかなと思っております。今、目の前に皆さんの作品が並べられておりますが、いろいろな木工品、クラフト製品なども旭川は非常にレベルが高い技術者がたくさんいる地域ではないかなと思っております。是非今日は次の世代の旭川の技術を担っていただく皆さんといろいろな意見交換をさせていただくのですが、旭川の未来の産業として、ある面、基幹産業の中核を担っていただくような部分についても今後大きく期待をいたしております。今、家具、木工も非常に差別化が求められている中で、高級品と廉価品との住み分けが非常にはっきりしてきており、市内の業者さんも高級志向ということで、非常にデザインなどに大変な技術力を持っている企業もたくさんありますが、是非、皆さん方からも時代の地域の産業を担っていただく人たちが多く育っていただければなという思いでおります。世代的にも20代～30代位の皆さんが多いのかなと思います。私も38歳でちょうど高橋代表と年は一緒ですね。世代的にも非常に共感できます。今日は非常に楽しみにしておりましたので限られた時間ですけどもよろしく願います。



まちづくり対話集会というスタイルで今日はやらせていただきますが、今まで各地域の住民ですとか、またいろいろな団体の皆さんと昨年の11月の就任以来、約8か月間、10数回開催させていただいております。これからも定期的にいろいろな皆さんのお話をお聞きすることで継続していきたいと思っておりますし、その中で行政の中に例えば事業として実現出来るようなものを見い出していくことができればと思っております。

今日は皆さま方からいろいろなご意見が聞ければと思っておりますのでよろしく願います。

高橋

こんばんは。高橋と申します。喋るのが苦手なのでうまく伝わらないかもしれませんが、まず「ミクル」について簡単に説明したいと思います。私たちミクルは昨年假結成をしました。旭川はクラフト、木工のまちなので、父ですとか先輩達もたくさんいるのですが、どうしても意見が違うところや、これから自分たちが活動、アピールする中で少し考え方が違うというのがありまして、昨年、岩手の「川徳」さんで展示会をすることになり、急きょ若手を集めていきなり展示会をしてしまったんです。その中で評価を得ながら今年2月に入り、これからみんなどうするという事になって是非やっていきたいということで正式にミクルという形で結成しました。

旭川のクラフトというのは意外に市民にも知られていない部分が多く、もう一度市民によく知っていただくと共に、北海道全体、もしくは東京、全国的に活動を広めてやっていきたいというメンバーが集まってやっています。誰かに任せるといってではなく、みんなが関わりを持ってお互いにいろいろな意見を出し合っ、とにかくそれに対して一つでもやっていきたいということで始めました。

ミクルという名前は井上君が考えたのですが、今までは何々協会とか何々組合という名称が多かったんですね。そういうのは嫌だということで、みんなで名前を募集して、井上君が考えてくれたミクルとつけました。ミクルという名前の意味について井上君から話してもらいます。

市長

英語なんですね。

井上

「mickle(ミクル)」という英単語なのですが、もとは「塵も積もれば山となる」ということわざです。英語にすると「たくさん」のという言葉の意味に「山」という意味でミクルという単語を使います。やはり一人一人の力だけだとどうしてもできないことがあるので、塵というわけではないのですがたくさん人が集まることで大きな事が出来るのではないかとということでミクルという名前にしました。

市長

それは素晴らしいです。

高橋

そういう感じでみんなでやっていこうということです。今回、代表と言われていますが、正式に代表というのは決めていません。決めてしまうことにより誰かに片寄って、任せてしまうようになってはいけない、常に一人一人、ここにいる10名が全員で関わって、何かやるときには協力、困っていれば助け合うのを忘れずに、そういう気持ちでやっています。

市長

差し障りなければちょっとお聞きしたいのですが、先輩たちとの意見の違いがあったという話をされていましたが、具体的には例えばどのような事なのですか。

高橋

要するに皆さん自分のスタイルが出来上がってしまっていて、今更新しいことをやろうと言っても「俺もういいよ、お前らやれよ」、「もう年金もらうからいいわ」とか言われ、少し守りに入り過ぎている部分があります。今、世の中は常に変動していますので、将来的にこのままだと駄目かなと感じています。

市長

戦いの姿勢ではないということですね。

高橋

そうです。それだったら「俺、もっとこういうことしたいんだよ」、「もっと旭川の人に知ってもらいたい」とか、そういう人たちが集まってやった方が一つにまとまるのではないかと思います。

市長

分かりました。

皆さん二代目の方も何人もいるんですね。また自分で始めた方もいるんですね。技術などは、お父さんやおじいさんがやっているところはそこで勉強できたでしょうけど、全く初めての方はやはりどこかに勤めたりとかして技術を会得してきているのですか。

高橋

「工房 灯のたね」の井上さん一人を除いてはどこかで勉強してきていますね。井上さんは旭川に来ていきなりやり始めました。おじいさんは旭川で工房を構えているのですが、自分はこういうものをやりたいと言っていきなり退社して旭川に来て、おじいちゃんの工場にある機械でとにかく木を削りまくって、かなりレベルが高くなってきています。

市長

その時計とバッグを作られたんですか。

高橋

照明の方です。一番向こうに座っている井上君が作りました。

市長

この照明は全部木なんですね。きれいに作りますね。
どうですか。これからの事業計画方針としては、どういうところのマーケットに売り出して
いこうかなどは皆さんで相談されているんですか。

高橋

今それを模索しているところですが、とりあえず旭川の人に知ってもらいたくて、今年旭
川空港内で展示会をやらせていただいたりしました。

市長

空港はたくさん人が来るところなのでいいですね。

高橋

全国から来られるので宣伝にもなるでしょうし、また送迎などで来た旭川の人にも知って
もらえます。そういう活動をしながら、いずれは東京首都圏にアンテナショップのようなも
のが欲しいと思っています。

市長

東京にアンテナショップを出すとなるとお金がかかりますよね。
何か旭川市で独自のそういうものを持っていれば、地元の方に交替交替で出品などし
ていただいたりできるのでしょうかね。物産品や食べ物は北電さんなどで東京駅の東口
のところに店を出して旭川ラーメンやお酒だとか出していますが、木工家具を常設してい
るアンテナショップというのは無いですね。

高橋

せっかくなので一人一人自己紹介してもらいましょう。合わせて作品も紹介してもらいま
す。

井上

「工房 灯りのたね」の井上と申します。この商品が一番最初に作ったものなんですけど
「灯樹色」という漢字を書いて無理矢理「つりい」と読ま
せているんですね。こんな感じで名前をつけているん
です。木材一つ一つを旋盤で削り、部品を4つ作って、
後から組み立てるという形で作っています。去年から
始めてやっと今年になって芽が出て来たかなという
ところなので、この会(ミクル)がなかったらきつとつくに
つぶれて居なくなっていたなとすごく感じます。



市長

主力製品なんですね。今まででどれくらい制作されたのですか。

井上

前に作ったものは売れなかったですし、今見ると売り物にもならないような形だったの
で、ここ最近になってやっと自分の中でも形が安定してきたかなという感じです。

市長

これは一個一個微妙に形が違うものなんですよ。

井上

そうなんです。機械に木材をかませてモーターで回すのですが、後は全部ノミで手で削っていくので微妙に形が違ってしまいます。自然に生えている木も全く同じものは無いのです。

市長

材質は何ですか。ちなみにお幾らでしょうか。

井上

松の木を使っています。針葉樹ですね。値段は税込みで1万2千円です。

市長

どうですか。売れ行きの方は。

井上

前は1万円を切る値段で何個か売っていたのですが、今回、東京に出品するという話をいただいたので、それに合わせて値段の方も替えさせていただきました。今日から始まっているので、どうなっているのかなと思っています。

市長

今日から東京で販売が始まっているんですね。どちらで販売しているのですか。

井上

伊勢丹で販売しています。

市長

たくさん人が来る場所ですから、たくさん売ればよいですね。

井上

すごく期待しているのですが、売れなかったらどうしようと心配もしています。

市長

大丈夫です頑張ってください。

奥さんと二人で一緒にやってらっしゃるのですか。

井上

はい。一緒にやっています。

市長

最初、機械の設備投資は結構あるんじゃないですか。

井上

もともと祖父が持っていたものがあるので、何とかしてそれを使っていこうということでやっています。

市長

おじいさんもやってたんですね。

井上

家具の脚というのですか、主にテーブルなどの脚を削る方をやっていました。

市長

家具屋さんも二種類あって、たんすを作る家具屋さんとテーブルとかいすの脚を作る家具屋さんとは別ですよ。私の母親も「いさみや」さんにずっと勤めていて去年退社しましたが、二十数年間お世話になっていました。家の実家にある家具は全部旭川から格安で譲ってもらいました。

丹野

東旭川町、動物園のすぐ近くで父親と2人で木工をやっている丹野と申します。

僕の場合は父が昔からかなりこった木工細工を仕事でやっておりまして、幼い頃からその仕事を見ていたということもありましたので、秋田の短大で2年過ごした後、旭川に戻り、父の仕事を手伝いながら、少しずつこのような自分のものを作っています。



市長

それの上はコルクなんですね。

丹野

そうです。コルクを張っています。父もやはり箱物を中心に作っておりまして、名刺入れですとか、少し大きなものでも手で簡単に持ち運べるような大きさの箱が中心です。機械の設備もそんなに大きなものはなく、こじんまりとやっているような感じです。

市長

展示販売はどういうところでやっているんですか。

丹野

東京の方では銀座の「松屋」さんなどで毎年春3月に展示会をさせていただいております。そこで商品を見た方がうちの方に注文をするという形で最近はやっております。

市長

市内では常設はしていないのですか。

丹野

今回、旭川屋で数点展示させていただいて、また空港の方にも少し置かせていただきましたが、常設はありません。

市長

せっかくの素晴らしい商品ですから、観光客が集まるようなところにこれを販売できる店舗が市内にあったら良いですよ。

市内にもクラフト館はいくつかありますよね。豊岡にありますよね。

丹野

そうですね。「ササキ工芸」さんですね。そこにもかなり昔に少し置かせていただいたことがありますが、最近はそこには無い状況です。

市長

永山の家具展示場には置いていないのですか。

丹野

大きなイベントがあったりですとかそういう時には少し置かせていただくことはあります

が、常設という形ではないです。

伊庭

美瑛町で家具を作っている伊庭と申します。

本来は家具を作っているのを持ってこれないのですが、たまたま額を作ったのでここに持ってきました。ずっと本州の方で修行をしていましたが、そこで漆を塗っていたので、この額も漆塗りなのですが、そういう家具を作っています。工場として機能し始めたのは今年に入ってからなので、まだ販売などもきちんとできていないのですが、こういうグループに入ったり、先ほど話しが出た永山の家具展示場には置かせてもらっています。



市長

売れていますか。売れなかったらどうやって生活してらっしゃるのですか。

伊庭

まだ全然売れてはいません。知り合いの方に下請けというか、本来の自分の家具ではない木工の仕事をしたりとかしています。

市長

今日持ってきたのは自分の作品だけけれども、これ以外にも作っているということですか。

伊庭

そうです。少しですが。

市長

こういうものがたくさん売れてくると、他の仕事しなくてもよくなるということですね。

漆の木というのは国内にも結構ありますか。

伊庭

漆の木はあります。

市長

原材料は国内のものですか。輸入品ですか。

伊庭

いろいろです。中国からも多く出回っていますし、国産のものもあります。

丸一

東神楽で木工をやっております、「TUC(ティーユーシー)」の丸一と申します。

うちは製品を最後までつくる会社ではないのです。主に家具メーカーさんの下請けという形で、部材加工、基礎足の部分を加工したり、材料を支給してもらい加工して戻すなどの仕事を主にしています。なぜここに製品を出しているかという、口で説明してもなかなか伝わらない部分が多くて、どうせなら自分で製品になるまで作ってみて、木でもこういう形が表現できるとい



うその技術を見せたくて持ってきました。技術を見せるためにいろいろものづくりをして挑戦しているところです。

市長

これは靴べらですね。すごく曲線的でいいデザインですね。これはやはり自分で発想されるのですか。

丸一

自分で全部考えて作ったものと、また仕事の関係で東京のデザイナーと知り合いになり、デザインのアドバイスをいただいて作ったものです。そのデザイナーは普段隠しているものを表に出すのが好きな方で、靴べらもプラスチックの製ものを吊して見えないようにしているよりも、上下逆に飾って見てもらうようにして、そうすることで花のように見えたりとか、そういうことを楽しむ方なんです。その人の影響を受けて作った作品です。

市長

加工は機械を使っているのですか。

丸一

全て機械です。NC工作機というコンピュータを使う機械です。

市長

入力をするると3次元的に加工するというものなんですか。

丸一

そうです。使っている機械はもう古いもので18年位前のものです。

だから極端な事を言えば18年前に同じ事ができていてもおかしくないということです。同じ機械でも使う人が違えばということもありますし、違う発想があるということを知ってもらいたくてPR商品というような形でやっています。

市長

会社の名称で「TUC」というのは何の略なんですか。

丸一

社長が考えたもので、Technique（テクニク）とUnion（ユニオン）、技術の融合という意味でつけたと聞いています。CはCompany（カンパニー）です。

高橋

改めまして「高橋工芸」の高橋秀寿です。うちは父の代から始めまして、私が2代目を継ぐような形で、家族とパートさんとやっております。主に木工旋盤、木を回して手で加工するという、手の技術の方の仕事を主にしながら、その中でうちはテーブルウェア、こういったコップなどが専門です。



市長

うちにも木のコーヒーカップがありますが、木のカップというのもいいものですよ。色が変わってきたりして味が出てくるんですよ、木というのは。そういう単色の色ですとやはり風合いが出てきますよね。

高橋

そうですね、この木でいいますともう少し飴色っぽくなります。コーヒーなどを飲んでいると中がコーヒーの色に染まってきたりします。当然、塗装はしていますがその表面に染みつくような形になります。

市長

それは材質は何ですか。

高橋

これは北海道の木のセンの木です。広葉樹ですね。この木は北海道と東北の方にあるくらいかな。世界にはないんですね。日本、北海道を代表できるようなそういった木です。意外にまだ家具屋さんには使われていないのですが。

市長

その木は他に家具などにも加工は可能ですか。

高橋

加工は可能ですね。

市長

他の木と風合いが違いますね。

高橋

センの木の良さは木の中でも特に白が強いということです。旭川家具は檜の木など色が入っているのが多いです。これはうちの技術を利用して、約2mmの厚さで作っています。

市長

これは厚さ2mmなんですか。力を入れたらこうたわみますか。

高橋

少したわみますね。

吉田

ミクルの事務局をしています「北嶺工匠」の吉田と申します。

うちは主に特注の家具を作っています、既製品というものはあまりありません。東京の取引先から図面が出て、取引先に出して、取引先が個人のお客さんの家に納めると僕はこのミクルの中で唯一職人です。僕は全くだまされません。どちらかともパソコンばかりで、家具とは少



るのですが、今日持ってきているのは、本来は普通の壁の所に立て掛けて使うものなんです。ブックシェルフなのですが、壁がないと立てられないものです。こういうあまり一般的ではないものが自分の好みなので、やはり一般受けはしません。でも一部の人がいいと思っ

てくれれば、それでいいという考えでいます。

市長

そういう需要もあると思いますよ。

吉田

僕は逆にそういうのを狙っているという感じています。

市長

世界に一つしかない家具とかは希少価値がありますものね。

吉田

そうですね。もともとうちの会社自体も小さいので大量生産はできません。一品作を中心にデザインを考え、製作の方は工場の人たちに手伝ってもらったりという形をとっています。他にはミクルや会社のホームページの製作、プロデュース、グラフィック関係でチラシの作成などを行っています。



市長

家具のデザインなどもしているのですか。

吉田

まだ勉強中です。

市長

将来的にはそういうところもしていくのですね。

吉田

あのシェルフにしてもほとんど初めてに近い作品なので、まだまだ至らないところもありますし、長くやっている人たちからすると「何あれ」と馬鹿にされるかもしれませんが、今までの人たちと同じ考えでいたら何も変わらないと思います。ミクル自体が新しい家具、新しいクラフトをやりたいというので集まっているので、何か少しぶっ飛んだことをしてもいいのかなと思ってやっています。

市長

ああいう二つ足の本棚などの発想はどういうところから出ているのですか。

吉田

こんなのはあまり見たことないとか、国内にはないとか。よく海外のインテリア関係の雑誌やウェブサイトなどを見て勉強しています。

市長

「北嶺工匠」さんはいろいろ賞をとったりしていませんか。

吉田

父がすごく若い頃なのですが、技能五輪というオリンピックがあるんですね、何年かは忘れてしまいましたが、日本一になりまして、世界大会で3位になったことがありました。

市長

技能五輪といえば、去年でしたか、旭川からも3人行きましたよね。旭川は技能五輪の木工、家具部門で例年結構いい成績ですよ。

お父さんの跡を継いで、技能五輪に出るように頑張ってください。

吉田

ありがとうございます。

青柳

「工房 Arms(アームズ)」の青柳と申します。

私はもともと販売の方をしていました。クラフトの流通に8年携わって、ものづくりは一切やっていませんでした。8年勤めて独立して、それまで取引先の木工場の人たちに教えてもらったり、その技術を見たりして、半分くらいは独学で今もやっています。作り手になったのは、ベテランさんがたくさんいるのに若い人がいなくて、私もずっと業界の中では、作り手も販売も合わせて一番年下だったんです。23歳から入っていましたが、自分よりも年下の方が全然出てこないんですよ。家具屋さんには若い人がたくさん入ってきますが、小物に関してはなかなか若手がいませんでした。先を見た時にこのまま流通に携わっているだけではこの先クラフト、小物類がなくなるまではいかないまでも、流通量は減るし、このままではいけないというのが見えて、自分の予想ですが、それで作り手に変わったのですが、ミクルでこのように同じ世代で集まれたことがとても嬉しく思っています。独立して今5年目を迎えています。最初はなかなかオリジナル商品も思いつかず、やはり受け仕事で生計を立てていました。それでこれが最初に出来たオリジナルの第1号ですが、これを機に流れがオリジナルに変わりました。



市長

かわいいですね。これ振り子で目が動くんですね。

青柳

これがたまたま予想以上にヒットしました。

市長

買いたいなと思いますものね。

青柳

これができて3年になりますが、年間千個以上出ており、これで大分助かった面はあります。やはり自分のものを作りたいという気持ちがあったので、受け仕事も減らし、今はこういう小引き出しも作っています。

市長

オリジナル商品ということになればやはりアイデアなんでしょうね。

青柳

そうですね。これはふくろうをモチーフに作ったものなんですけれども、この表情というか目の動くところが評判がいいです。

市長

どういうところで売っているんですか。

青柳

東京など本州が多いですが、北海道物産展などや家具の小売店にディスプレイ的に置いていただいたり、市内ではクラフト館さんに置いていただいたりしています。

市長

置くところが増えれば増えるほど売れる個数も増えますよね。

青柳

そうですね。最初は私一人で製作していたのですが、昨年1年間は夫婦で製作しました。それでもなかなか手が追いつかないくらいで、嬉しい反面、生産が追いつかないような状況です。Arms(アームズ)という名前も手をたくさん加えるという意味合いですが、人手が足りない状況です。

市長

1日に何個くらい作れるものなんですか。

青柳

細かなパーツに分けて作っていますので、このフクロウであれば大体3日で30個、引き出しを入れたら6日で20個から30個の間くらい生産しています。

市長

機械よりもかなり手の入る部分が多いということですよ。

青柳

そうですね。これでもかなりパーツの数としては多いです。3日単位、6日単位ということでやっています。

市長

いい物ができて、それをどうやって売り出すかということが大事ですよ。

青柳

いざ自分で作るとなるとどうしても手が抜けないという感じにはなりません。手を加えれば加えるほどお客さんに喜んでいただけるので。

市長

その時計は幾らで販売されているのですか。

青柳

税込みで10,500円です。

花本

この緑が丘の旭川リサーチセンター内でキャンドルを作っております、「D'ESPACIO Candle」(デスパシオ キャンドル)の花本と申します。

主にディップ&カーヴというタイプのキャンドルを製作しているアトリエです。

市長

これは材質はなんですか。



花本

ロウです。

市長

それ全部燃えるのですか。

花本

ええ、全部普通のロウソクと同じく燃えます。ただもったいなくて火を点けられないというお客さんもいらっしゃるので、中をくり抜いて、そこに別のロウソクを入れれば何回も使えるというタイプのものもあります。

市長

これはどうやって加工するのですか。

花本

何種類も溶かしたロウを用意しておき、そこに中心となる部分、コアとなるロウを溶かしたロウの中に何度も浸けて、木の年輪のように色の層を作り上げていきます。それをナイフを使って表面をカットして、手で捻ったりします。

市長

これは全部手作業なんですか。

花本

はい、全部手作業です。

市長

全部均等にできるものなんですね。その大きいものだとずっと火を点けていて何時間くらい保つのですか。

花本

キャンドルというのは、1回に2、3時間以上灯すと周りも高温になってきて、形が崩れやすくなってしまいますので、2、3時間灯して、また次の日灯してという感じで使うと綺麗に使えます。そうすると1か月は保ちますね。

市長

そういうのは初めて見ましたね。どういう所で売っているのですか。

花本

インターネットやブティック、ほかにウェディングプランナーさんがお客さんを紹介してくださったりとかという形です。

市長

やはり購入するのは女性の方が多いのですか。

花本

そうですね、女性の方が誕生日だったりとか、新築祝いだったりとかというようにプレゼントが多いです。

市長

インターネットであれば全国から注文が可能ですね。

花本

そうなのですが、まだ始めたばかりなのでまだそれほど注文はありません。

市長

そうですね、楽しみですね。

大門

東川の「BAU(パウ)工房」で働いております大門と申します。父が工房を構えており、私はまだ始めてまだ3年と少しと短いのですが、最初は父の仕事を手伝っておりまして、主に注文家具を作っていました。また父が作った作品を年に何回か展示会に出しているのを見て、だんだん自分も作品を作りたいと思いました。しかし、なかなか一人では動けないでいた中、ちょうどミクルと知り合えて、グループで展示会などをして広めていけるようになりました。旭川といえば家具のまちということを知っている人たちの中には知らない人が多いです。少し知名度が下がってきている気がします。



市長

小学校の社会科の教科書などに載っていないですかね。私が小学生の時には教科書に旭川はパルプと家具と木工と書いてありました。今はどうなんでしょうね。

大門

動物園は有名になっていますけどね。動物園と一緒に家具、クラフトも有名にしていけたらいいと思います。そういう面でミクルは行動しています。

市長

やはり1人で行動するのは違いますよね。みんなで活動した方がいいですよ。

大門

それでミクルの仲間にさせてもらいました。これは最近創った作品です。

市長

書類入れですね。

大門

はい。A4サイズです。

市長

無機質なスチール製と違って、机の上に置いてもぬくもりがあっていいですね。これはどれくらい生産しているのですか。そんなに大量生産ができるものではないですよ。1個創るのにどれくらいかかるのですか。

大門

そうですね。これに関しては自分一人でやっているのですが、月に20個程度です。

市長

これはどこに行ったら買えるのですか。

大門

自分の工房内の小さい展示場やミクルのメンバーと展示会をした時に売っています。また吉田さんがミクルのホームページをつくっていますが、そこで販売を始めようかという話もあります。

市長

ミクルのホームページでオークションができるようになるといいですよ。

吉田

はい、今計画中です。

市長

いろいろなところとリンクしてたどり着きやすいようにしたらいいですね。今たくさんありますよね、そういうオークションなどの市場は今たくさんあるんでしょうね。

吉田

これからはインターネットというのを絶対に視野に入れたいと思います。

市長

そうなんですよ。お店を持つよりも経費もかからないですしね。それとアクセスを増やすということですね。

吉田

そうですね。そこが一番重要だと思います。

堀内

漆の仕事をしております堀内と申します。

秋田で工芸の勉強をして、その流れでもう少し漆の塗りを勉強したいと思い、岩手の町立の若者の定住化を目的とした漆器の研修センターで2年間勉強して、7年位前に旭川に帰ってきました。今は主に岩手産の漆を、国産漆を使って丈夫な日用雑器を作っています。私のお客さんはそんなに多くはありませんが、食を大事にしたり、きちんと生活したいというライフスタイルで暮らしている方々が多いです。漆器は歴史はもちろん古いのですが、使うほどに艶が出てくるものです。そういう物を子どもに使ってもらい、豊かな心を育てていけるような、漆器を通しての生活提案というわけではありませんが、豊かな生活を提案したいと思って日々仕事をしています。



市長

木を削ったりなどはやってはいないのですか。

堀内

自分で木を削る技術はないので、図面だけ引いて、岩手のなじみの木地屋さんに発注していますが、ゆくゆくは地元の木地を使えたらなと思っています。

市長

地元でそういうことができる業者はないのですか。

堀内

高橋さんの所がそうですね。回転体のものなので。

市長

どういう木を使っているのですか。

堀内

トチですね。トチはきめが細かいんですよ。ですから塗りをしていく分には非常に手間が掛からないです。また、地元材料を使ったようなものを、地元の人に使ってもらえるような、クラフトの地産地消を今ちょっとやりたいなと思っております。

市長

こういうところで作った、こういう素材を使った食器でご飯を食べたらそれだけでおいしそうですね。

堀内

粗食が結構おいしく食べられます。

市長

それはありますね。こだわりですものね。

本当に日本伝統の古来の技術ですからね。是非今度は生地から旭川で作ってオリジナルを作っていたらもっともったいいなと思いますので頑張ってください。

皆さんには丁寧に説明を聞かせていただいてありがとうございました。木工やクラフト製品、また他の地元の食材なども、いいものを作ってどうやって世間に知らしめるかというのは非常に大変なんでしょうね。そういう面で団体をつくり、例えば展示会や物産展に出す回数を増やしていくとか、旭川の産業として目玉といえば動物園、家具木工ということで、ミクルさんで作っているクラフト、木製品などもネームバリューが上がってくれば飛ぶように売れるのかなと思いますが、その辺りについてももし行政でお手伝いできることがあったら、いろいろと提案していただければと思います。まだスタートしたばかりで思案中なのかなとも思います。

吉田

展示会に関しては地元の人にも旭川の家具、クラフトをもっと知ってもらおうということも念頭に入れながら、全国での展示会、物産展なども積極的にやっていけたらいいなと思っています。

市長

両方ですよ。ただやはりマーケットは圧倒的に市外ですよ。旭川市には36万人しかいないですが、東京は1千万人以上いますからね。それはやはり違うと思いますよ。

吉田

やはりどうしても力を入れるのは都心にスポットを絞って、そこから周辺に広げていくような形の方がやりやすいのかなと思います。

市長

でも本来は旭川市民が皆知っていて、その人たちが全国いろいろな所で話をしてくれれば、それはすごい宣伝効果になるんですよ。それとはまた別に全国にマーケットを持つ、そういう両輪でうまく回っていったらいいですね。

高橋

そのために空港展などを行いました。旭川のみちの中には家具やクラフトなどを見せ

る所がないですよね。本当は全国的に知られていなければおかしいのに、旭川のまちにそれがありません。だとすれば空き店舗や駅などを利用して見せられることができないのかなと思っています。また旭川市民にも知ってもらいたいということで、市役所の入り口の棚に何点か作品がありますが、実はその中に父の作品が20年間あり、展示物が何も変わっていないようです。これは非常にもったいないと思います。3か月に1回とか半年に1回でもクラフトコーナーがあったりして旭川の物産を市民に更に知ってもらおうというようにすると良いのではないかと思います。

また、何千人もいる市の職員が一人一人名刺に、例えば「私は旭川ラーメン〇〇〇屋さんが好きです」、「僕は旭川家具の〇〇〇の家具が好きです」などを印刷しておく、名刺をもらった人は「あの人はこういうのが好きなんだ、じゃあ今度行ってみよう」ということになり面白と思います。いずれはミクルでもそういう名刺を作りたいと思っていますが、これを市の職員がやるとそんなに経費もかからないで市内外の人に知ってもらえ、すごく宣伝効果があると思います。

市長

私も動物園のホッキョクグマの写真入りの名刺です。家具や木工の写真はありませんが、動物園シリーズや旭橋や大雪山の風景ですとか、そういう写真がたくさんあって、多くの職員はその中から好きなものを選んで、台紙代を500円払って使っています。最近は動物園が多いのですが、そのレパートリーを増やすというのもいいかもしれないですね。ラーメンや木工など、旭川では是非今後宣伝していきたいというものについて増やしていくということは検討できますね。これはコンベンションビューローでやっているんですよね。レパートリーを増やすことはそんなに難しい事ではないですよ。

企画財政部長

台紙、原板を作るということですね。クラフトを写真にしたり、写真ばかりではなくて絵でもいいでしょうし、版画風にしてもいいでしょうね。

生活交流部長

私が使っているのは版画風ですね。

企画財政部長

売ればコンベンションビューローの方でそういう形でやるのもいいかもしれないですね。

市長

もし皆さんの作品なども何枚か入れられることができれば、宣伝になりますよね。個人の企業名などを入れるのはどうなんでしょうかね。

生活交流部長

特定の企業、例えば特定のラーメン屋さんの名前を入れると、何故そこだけってことにもなりかねないですね。旭川ラーメンというのであればいいかなと思います。

企画財政部長

デザイン的に写っているというのであれば別に問題はないと思います。

生活交流部長

その関係の人はすぐに特定できるでしょうけど。ラーメンどんぶりが写った名刺というのもあり得ると思います。

市長

それは少し検討してみますね。

高橋

とにかく全国に展示会を開こうということで、去年やった岩手の「川徳」さんでは今年も来年も3か年やります。それから東京の方でもちょっとやってみないかという話もありますが、アンテナショップというのはすごく興味があります。できれば独自でミクルショップなりクラフトショップなりができればいいと思います

市長

何かいいつてがないものでしょうかね。木工などの物産展は年に何回かあるんですか。

高橋

物産展自体は結構あります。私の知っている業者さんも年間3、40回以上かなりこの中からも持って行って売ってきてくれています。伊勢丹や天満屋、東京、広島を中心に物産展はかなりあります。伊勢丹であれば、1回ものを渡していけば新宿伊勢丹、何々伊勢丹、何々伊勢丹というように商品はずっと流れていきます。それが年に2回から3回あります。そこでもいいのですがやはりきちんと常設させてくれる所があれば一番いいと思います。

市長

独自で持つのが一番良いのでしょうか、どこか家具屋さんなどの店舗の一角を展示コーナーとして借りてそこに常設するというのも一つの方法かもしれませんね。場所がいいところでないとなんかだめなんではいけません。家賃はどれくらいするんでしょうね。広さにもよりますがね。

高橋

廃校になった学校を利用して何かやりたいと思っています。

丹野

桜岡の方で仕事をしているのですが、廃校になった学校があり、そこを利用して、新しく木工をやりたいという方が自由に設備を使えるような所があれば、さらに木工が深まっていくのではないかと思います。木工を始めたいが設備にお金をかけられなくて、なかなかできないという方が結構いらっしゃいますので、建物としても十分な広さがありますので、そういう皆で使えるような設備があるスペースがあれば、もっともっと活性化していくのではないかと考えています。

市長

第一中学校が今年の3月に廃校になりました。神居古潭中学校もそうですが、まだ廃校後の利用については決まっていませんね。

先日東京に行った時に、少子化の影響なのか都心で廃校になった所に行ってきたのですが、そこをぬいぐるみや人形を作ったりするスペースとして開放していました。中村園さんという旭川出身の方なのですが、そういう活用をしていました。廃校の後利用として一つの選択肢として考えられますよね。

第一中学校は地元の意見としては農業体験に来る人たちの施設に使いたいという話もあり、第四小学校はお年寄りの方たちの福祉施設に決まったようですが、いろいろその辺も選択肢の一つとして考えてみますね。皆さんもいろいろなアイデアを持っていますね。

市役所内の展示スペースというのは結構市民の皆さんが集まる場所だから、売り出したい物を常時展示するスペースとして提供するというのはいいですね。

青柳

3か月毎でも半年でもいいと思います。

企画財政部長

確かに市役所の中の正面に棚があります。スペースを与えてくれれば、作品を自分で持ち込んで置きますよということについては、確かに今展示してあるクラフトも古くなっておりまし、お酒も替わってないですから、替えるというのは可能ではないでしょうか。

生活交流部長

季節によって替えるような形もいいのではないのでしょうか。

市長

そうですね。その方が市民の皆さんも飽きないかもしれないですね。違う物を期限を決めて置いたりですとかね。

青柳

替わることによって市民の目が、ああ替わっている替わっているって、その刺激がやはりいいと思いますね。

企画財政部長

市民が待っている所に棚を置いて、作品をインテリア的に置くなどできればもっと理想的なんでしょうけど。

高橋

旭川屋にあるような棚があるといいですね。

企画財政部長

1階ロビーの喫煙所があった所に棚を置いてそういうようにできるといいですね。そこを所管している部署が積極的にPRして鮮度を保つためにやるとなれば可能だと思いますね。

生活交流部次長

第三庁舎の1階の所が結構広いです。スペース的には結構ありますからね。

工芸センター所長

私どももそこに展示させてほしいとお願いしたのですが、管理側としては値段と名前をつけるのは駄目だということでしたので、断念した経緯があります。

市長

そうですね。でも名前くらいつけておかなかつたら、誰が作ったかわからないですよ。

工芸センター所長

第三庁舎にしても、本庁の正面にしても、総務部で管理して、中の物を集めるなどしているのは商工部でしています。

企画財政部長

だから集めるところと管理するところで話をすれば、今のような話は別に規則もなければ法律もない訳だからできるんですよ。名前も駄目だというのは特定の売名行為につながるということなんでしょうが、そんなレベルの話ではないですよ。

工芸センター所長

お酒などのパッケージなどは問題ないらしいです。クラフトだとそういう表示していないですから。

企画財政部長

ここにいる人たち以外の人たちのことも考えて、公平性を欠くという発想なんですね。

市長

応募者が多くなってきたら、例えばくじ引きなんてこともあるかもしれないですね。

企画財政部長

例えば期間を2週間や1か月間とするなどすれば公平ですね。そんなに難しい話ではないです。

市長

それは是非いろいろと検討してみますね。

高橋

よろしく願います。旭川屋のギャラリーとは別に旭川としてのギャラリーがあるといののかなと思います。実際に旭川屋に展示していて、東京のショップの方がそれを見て、「これ面白いから、サッポロファクトリーの新店舗で展示会をやらないか」という話も今来ています。旭川家具やクラフト、陶器など旭川のいいものをきちっと発信できる所をつくっていただけるといいと思います。今は旭川にたくさん人が来ており、旭川屋に立ち寄る観光客も多く、その中にはショップの方や百貨店の方も来て見ているだろうし、そこがもう少しきちっとあると宣伝になると思います。

市長

今日はあっという間に時間が経ってしまいましたが、いろいろと貴重な意見をいただきありがとうございます。何点か提案していただいたものがありますので、またこれについてはいろいろと検討させていただいて、何とかお役に立てる部分がひとつでもできたらいいと思いますので、よろしく願います。あと何か最後に言い残された事がありましたら、どうぞ。

丸一

駅や空港に降り立った人たちが旭川にクラフトや家具があるんだということを少しでも感じ取れるような工夫をしていただけたらなと思います。どうしても動物園がメインだったり、空港や動物園のお土産が中国製だったりとか、そういうことがあるので、具体的に何かと言われるとちょっと困りますが、旭川の産業としての家具やクラフトというのも外部から来た人たちが感じ取れるような工夫があればと思います。

私たちがこれからいろいろな活動を通して旭川をアピールしていきますので、少しずつでもいいので協力していただけたらなと思います。

市長

そうですね。旭川の駅は平成22年の秋口に新しくなりますが、やはり「木のまち」というイメージで、木を使ったような駅にしたいというような話でいます。その中で家具や木工などを展示できるようなスペースができればいいですね。またJRや空港ビルの社長さんに会った時に提案してみますね。

市長終わりのあいさつ

今日は貴重なお話を聞かせていただきありがとうございました。いつもはご年配の方々と多く話をしていますので、やはり同世代の若い人たちと話をするのはそれはそれで

共感できる部分がありますね。是非若い世代、一緒に頑張っていけたらいいと思います。
今後ともよろしくお願いします。